

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32682

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23049

研究課題名（和文）日本語の文字使用における創造性に関する認知記号論的研究

研究課題名（英文）A Cognitive Semiotic Study on Creative Aspects in Japanese Writing.

研究代表者

水野 真紀子（Mizuno, Makiko）

明治大学・理工学部・専任講師

研究者番号：90848566

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：研究期間の前半は、書き言葉の問題を言語相対性の議論の一つとして捉え、それを検証するための理論的モデル構築を行ない論文にまとめた。研究期間の後半は、「ブーム」と評される近年の短歌の受容と第二次世界大戦後のドイツ語圏で関心を集めた具体詩との比較から、短型詩における文字選択の効果について検証した論文を執筆した。また、アンケートによる量的な手法、眼球運動測定装置による質的な手法を用いて、短歌を読む際の文字選択の効果を多方向から評価する方法について、国際認知記号論学会において発表予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では国字の問題として書き言葉の持つ心理的な影響について議論がなされることがある（例えば、障害の「害」の字の扱い）。また、短歌をはじめとした文学的な表現活動においても文字の選択は作者にとっての重要な関心事である。日本語話者の表記への意識の高さは、日本語の書記言語が他の言語と比較して意味に干渉する機能を有しているからに他ならないが、雰囲気だけで議論を進めるのではなく、本研究が示したように実際にどの程度の影響を持つのかということを経験的に考え、実践的に検証を加えながら日本語の書き言葉の実態を解明しながら議論を深めていくことが必要である。

研究成果の概要（英文）：In the first half of the research period, I considered the problem of written language from the perspective of linguistic relativity and constructed a theoretical model to test it, which I summarised in a paper. In the second half of the research period, I wrote a paper examining the effect of text selection in tanka poetry, based on a comparison between the recent 'boom' in tanka poetry and the concrete poetry that attracted interest in German-speaking countries after the Second World War. In addition, at the International Conference on Cognitive Semiotics, methods for evaluating the effect of letter selection in tanka reading will be presented, using quantitative methods based on questionnaires and qualitative methods based on eye-tracking devices.

研究分野：認知記号論

キーワード：記号論 文字論

## 1. 研究開始当初の背景

日本語の書記言語の特徴は、他の言語と比較して情報量が多いというところにある。

日本語の文章を読む際に、漢字の読み方は分からないが意味は分かるということがしばしばあるが、日本語は中国語の表語文字を意味の面から日本語の語と結びつけることで使用しているため、意味と音の間の結びつきは弱い。また、日本語には三種類の文字が混在しており、日本語では、語をどの種類の文字で記すかを選択する余地がある。日本語における文字の使用の自由度を示すのは、日本文化における文字遊びの多さであり、古くから、万葉集の戯書、江戸時代の狂字・噓字・鈍字など、文字を使った言葉遊びが存在する。

ヨーロッパの具体詩という文学運動が、漢字を模して成立したことが示すように、アルファベット文字文化圏において漢字という媒体に対する関心は非常に高い。しかし、中国における漢字は、ヨーロッパ人が漠然と抱くイメージとは異なり、基本的には表音語として機能し、絵的な自由度は低い。そういった状況を鑑みても、漢字を含む三種類の文字が使用され、文字を使った創造的な遊びが古くより現代に至るまで親しまれている日本語の書記文化は、世界的に見ても非常に希である。

筆者はこれまで、視覚情報と言語情報の融合的に用いる芸術的・創造的な作品を分析してきた。具体詩や視覚詩などの作品において、視覚的要素と言葉の意味を結びつける役割を担っているのは文字である。文字は象徴記号としての言語を表す媒体であるとともに、それ自体が視覚情報でもある。アルファベット文字を使った作品では、

文字の配置でイメージやダイアグラムなどの類像記号を作りだすことで、語や文章に視覚的意味が与えられる。それに対し、漢字を用いた作品では、個々の文字もしくは部首に類像性が備わっている場合が多いため、元々の視覚的意味を強化するか、解体して新しい類像性を与えるかという場合が多い。いずれの場合も、アーティストは、視覚的な演出によって言語情報で表される意味をどのようにして変容させ、新しい解釈の可能性を成立させるかという点で工夫を凝らしており、解釈という行為から見れば、認知言語学の意味の融合: conceptual blending (Fauconnier, Gill, and Mark Turner. (2002) の一例として捉えることができる。

## 2 . 研究の目的

本研究は、日本語の文字使用がどのように日本語の表現の幅を広げているのか、読者が文字や書記情報からどのようにして「言外の」意味を得て解釈を行っているのかを探るものである。本研究の対象となる、日本語の書記文化の個々の事象に関しては、国内で史学的・文学的な分析が行われて来たが、本研究の焦点は、個々の表現の評価ではなく、言葉と視覚的表現をつなぐ媒体としての文字の果たす役割の創造的な側面を明らかにすることにある。スマートフォンの普及によって、口頭言語のコミュニケーションと並んで書記言語のコミュニケーションについて世界的に関心が高まっている現在において、この問いは日本語話者の関心にはとどまらない。

このような本研究の主題は、「日本語とはどのような言語なのか」という非常に大きな問いに接続している。音声言語中心の言語学はこれまで日本語における豊かな文字使用の文化を無視して、音声として現れる言語のみを西欧の言語理論に当てはめてきたが、

それだけでは日本語の文化の全体を捉えることはできない。

本研究は、認知記号論的視座に立って日本語の文字使用における創造的側面を明らかにするものである。様々な種類の意味が交差する場としての日本語の書記言語について、認知記号論的な視点から、読者が文字を介して書記情報からどのような種類の「言外の」意味を得て全体の解釈を行っているのか、また創造的な書記表現についての解釈行為と審美的な鑑賞行為の間にどれほどの相違点が見られるのかを明らかにすることを目的としている。

### 3．研究の方法

本研究は、認知記号論の視座から理論的なモデル構築を行い、そのモデルに対して統計的・実験的な検討を加えて発展させるものである。現在、認知記号論の研究では、質的な分析だけではなく量的な分析や、実験的な研究手法を活用することが求められており、本研究でも理論的な分析に加え、質問紙を用いた統計的調査や眼球運動測定などの実験手法を用いて分析を加えた。これまで日本語の文字使用の創造性について認知記号論的手法を持って明らかにしている研究はない。日本語の文字使用についての研究結果を、文字研究の一般的議論に接続することで、本研究が国際的な文字研究の基盤の構築に寄与すれば、日本語の文字使用の独自性について認識が高まり、今後の文字研究において日本語の研究に期待される役割が大きくなると考えられる。

### 4．研究成果

本研究は、日本語の文字使用における創造性に関する認知記号論的研究であり、日本

語の文字選択がそれを使って表される意味内容にどのように干渉するかという点について研究を進めてきた。

研究期間前半では、表記の問題を言語相対性の議論の一つとして捉え、それを検証するための理論的モデル構築を行ってきた。日本では、障害の「害」の字をひらがなで表記することが国語文化会では議論されているが、それを単純な表記の問題として捉えることには問題がある。しかし、日本語話者が表記について非常に高い意識を持つからこそこのような議論が立ち上がっていると言える。表記への意識の高さは、日本語の書記言語が他の言語と比較して意味に干渉する機能を有しているからに他ならない。

研究期間後半は、本研究の当初の目的の「創造性」というところに立ち戻り、日本古来の短型詩である「短歌」に注目して研究を行った。「ブーム」と評される近年の短歌の受容と第二次世界大戦後のドイツ語圏で関心を集めた具体詩との比較から、短型詩における文字選択の効果について検証した論文を執筆した（審査中）。また、アンケートによる量的な手法、眼球運動測定装置による質的な手法を用いて、短歌を読む際の文字選択の効果を多方向から評価する方法について、国際認知記号論学会において発表予定である。

以上の研究から、特に短型詩においては、文字選択が漢字と仮名の視覚的印象の違いという差異以外にも、読みのスピードとそれによる音の介在度合いや前景化というものに密接に関わっていることが明らかとなった。今後この研究をさらに発展させるためには、統計的・実験的な検証の方法をさらに深化させていくことが必要であると考え。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 水野真紀子	4. 巻 562
2. 論文標題 「ことばと思考」再考ー日本語の書記言語の認知モデル構築に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 141-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Makiko Mizuno
2. 発表標題 Choosing Letters: Exploring Influence in Reading Tanka Poems
3. 学会等名 5th Conference of the International Association for Cognitive Semiotics（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Makiko Mizuno
2. 発表標題 An artistic strategy for visual poems: emphasis on the similarity
3. 学会等名 12TH CONFERENCE OF THE INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR VISUAL SEMIOTICS: VISUAL SEMIOTICS GOES COGNITIVE（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------